

『物質と記憶』の理性的自由

永瀬雅恵

「考える存在である人間においては、自由行為は感情 (sentiments) と観念の総合とすることができ、自由へと至る進展は理性的 (raisonnable) な進展と言いうる」(MM, 207)

I. はじめに

現代社会においてベルクソンの哲学はいかなる射程を持ちうるのか。哲学の語源である *Philosophia* すなわち「愛知」とは、論理学、自然学、倫理学の三つを連繫させながら、人間生活における全ての事柄に正しく対処するための実践的知識を求めることにあった。古代より感情は、時に人間を破壊的行為に導くものとして、人間本性の弱点とみなされ、理性によっていかに制御するかが問題となってきた。しかし、このような伝統の中においても、理性を感情に隷属したものとすることで、両者の地位の転倒を図ったり、感情を崇高な行為の原動力とみなす試みがなされたりしてきた。現代倫理学においても正義や義務を原理とする道德の限界性に対して、愛着に基礎を置く倫理学の試みがある。実際、正義はそれが存在するためには悪の存在を要請するのであり、正義に基づく倫理を通じては平和な社会は実現しえない。だが、個人的な愛着を原理とする倫理学では、個別性が重視され、普遍的規則が否定されるという側面がある。従来の道德を支持する側からは、こうした姿勢は恣意性を免れないという批判がある。このような今日の状況の中で、小論で扱われる問題は、*affection* という感情的要素に導かれる行為が、理性的たりえ、恣意性を回避しうるものであることを理論的に示すという意味で重要な意義を持つだろう。以下では、いかにしてベルクソンが、感情と感覚からなる *affection* 概念によって、理性的な判断に基づく自由行為を基礎づけたか、ということを見てゆこう。

II. 『試論』における自由論の問題点

冒頭に挙げた、『物質と記憶』(1896)のこの一文は、いささかわれわれを驚かせる。ここで自由は「理性的」なものとされているが、ベルクソンの自由論の書として知られる『意識に直接与えられるものについての試論』(1889, 以下『試論』)では、「私たちが深く自由であるほど、明白な理由 (*raison*) が一切ないということが顕著になる」(DI, 128)と言われていたからだ。自由を理性的なものとするに至った、『試論』から『物質と記憶』への移行には何があるのか。いかにしてベルクソンは自由行為を「感情と観念の総合」、「理性的な進展」と言いつたのだろうか。この疑問を明らかにするために、まず『試論』の自由論を見てゆくことから始めよう。

深く自由であるほど、明白な理由を欠く、と『試論』で言われるのは、ベルクソンは自由を「人格全体から出てくる、人格全体を表現する行為」と定義するからである (DI, 129)。「自我から、そして自我のみから発する全ての行為を自由と呼ぶことに決めれば、われわれの人格の印を身につけた行為は真に自由である。なぜならわれわれの自我のみがその作者であることを主張するだろうから」 (DI, 130)。このようにベルクソンの自由概念は自己に根拠ないし原因を置くものと言えるが、行為が自由であると言いうるには、その行為が人格の独自のニュアンスを反映していなくてはならない¹⁾。なぜなら、「外側にいる観察者にとって、われわれの活動を絶対的な自動性 (automatisme) と区別するものはない」からである (DI, 113)。深い自我は過去の心的状態全てを現在の状態のうちに相互浸透させており、各人皆異なるニュアンスを有している。このニュアンスが各人の独自性を形成し、人格性をなす。「ある意味でわれわれは理由なし (sans raison) にそれら〔の意見〕を採用した。なぜならわれわれの目に価値をなすように見えるのは、それらの意見の持つニュアンスが、われわれの他のあらゆる観念に共通する色合いに一致していること、われわれが最初からそこにわれわれのうちの何ものかを見ていたからなのだ」 (DI, 100〔〕内引用者)。すなわち、われわれにある意見を採用させたのは、その意見が、その人の人格性が有するニュアンスと同種のニュアンスを帯びていることなのだ。したがって、ベルクソンにおいては、深層の自我をなす心の深い状態、つまり過去の来歴全体からなる人格性があらわれることが自由とされる。しかし言語は万人に共通の言葉で表すため、各人それぞれの独自の観念を表現できないが故に (DI, 123 sq.)、自由行為の言葉による「説明」は空虚なものとなる。この意味で、自由行為においては「われわれは理由もなし (sans raison) に、おそらくあらゆる理由 (raison) に反してさえ決心」するとされるのだ (DI, 128)。

しかし、理由を欠く行為を自由とみなすベルクソンの自由概念は、自由行為を衝動的行為や恣意的行為から区別しえないという理論的困難を避けられないだろう。もちろん、ベルクソンの自由行為は衝動的行為と解されるべきものではない。衝動的行為とは、刺激に対して反作用によって即座に反応する行為だが (MM, 170)、こうした行為はベルクソンにおいて自動運動とされ、自由行為の対極に置かれるからである (DI, 25 sqq.)。しかし実際、こうした批判が『試論』公刊直後になされた²⁾。それらのうち、われわれの注目するのは、レヴィ＝ブリュールとギュスタヴ・プロのものである³⁾。レヴィ＝ブリュールは、以下のように書評に書いている。

この自由は、自由を理性 (la raison) と密接に結びつけたい者や、自由を『善意志』と呼ぶ者を満足させないだろう⁴⁾。

また、プロによる次の批判はまさにわれわれの指摘した問題に触れている。

深く個人的なものだとしても、隠れた衝動に従うことが自由なのだろうか⁵⁾。

人が、私たちのうちに、それに類するものを認めないような動機によって行動する時、私たちは、その行為を欲されたものと見なしえないし、したがって、自由とも見なしえない。なぜなら、私たち自身、いかにしてそれを欲しえたのか分らないからだ。そうした振舞いは私たちには気まぐれ (capricieuse)⁶⁾ や無分別に見える⁷⁾。

なぜなら、それ〔自由〕を取戻すためには、… 知的思考から非反省的自発性への、人間性から動物性への退行が必要だろう…（〔 〕内引用者）⁸⁾。

本論冒頭に挙げた理性的自由のテーゼは、こうしたプロ達の批判に対してベルクソンが提出したものと考えられる（MM, 206 sq.）⁹⁾。だが周知のごとく、『物質と記憶』の主題は心身関係論であり、自由についての言及は散見されるものの、まとまった記述は見られず、理性的とされる自由行為の合理性の根拠は明らかとはいえない。そこで、この点を明らかにするために、われわれは導きの糸として『物質と記憶』の affection¹⁰⁾ 概念を取り上げる。なぜなら affection は『物質と記憶』の冒頭で、「身体が受取る作用と応じる運動の間に非決定性を導入し、主体的な行動に伴う」とされており、「意志と自動性の境界」を示すはずだからである。しかるに、この『物質と記憶』の affection 概念は、『試論』の sensation affective 概念を継承していると考えられる。そこで、『試論』の sensation affective について見てゆくことから始めよう。

Ⅲ. 『試論』の sensation affective

『試論』第一章で sensation affective について一節が割かれているが、そこでベルクソンは affectif なものを、外から受ける変化としてよりも、快苦の性格を有し、われわれの身体による反作用を表すもの、あるいはそうした反作用を引き起こすものとして語っている（DI, 24 sq., 29, 35）。sensation affective は、外的刺激を受けて身体のうちが生じようとする未来の自動的反作用の下図を含むので、われわれはその反作用の性格を知ることができ、それに抵抗することが可能となる。

快感や苦痛、つまり快いものや不快なものが反作用を引き起こすとされるのは、苦痛は有機体をそれから逃れるための様々な行動へと駆り立て、快感は反射作用（une action réflexe）¹¹⁾ によるかのように身体をそれへと向かわせるからである。そして、それを押しとどめることが、われわれに委ねられている（DI, 25 sq.）。このように自動的反作用に対する抵抗を可能にするという意味で、ベルクソンは感覚（sensation）を「自由の始まり」（DI, 25）と言う¹²⁾。「自由な運動は、そのきっかけである外的作用とそれに続く意志された反作用との間に sensation affective が挿入されることを私たちに示す点で、自動運動と異なる」（DI, 25）。sensation affective は、外的作用と意志的反作用の間に挿し込まれるが、その役割は「自動的反作用と他の可能な諸運動との選択をわれわれに促すこと」（DI, 26）とされており、sensation affective は身体の介在する作用反作用の過程に非決定性を挿入し、自動的でない意志的行動を可能にするものと言える。

Ⅳ. 『物質と記憶』の affection

次に『物質と記憶』の affection の検討に移ろう。『物質と記憶』では感情と感覚が合わせて affection と呼ばれ（MM, 12）、その諸性格が第一章の冒頭で列挙されている（MM, 11 sq.）。そこには、『試論』の sensation affective の「作用と反作用の間に非決定性を挿入する」という性格をほぼ踏襲しているものと、『物質と記憶』で新たに加えられたものが見出される。後者としては、身体を他のイマー

ジュから区別させる点、運動能力を有する生物に委ねられた、脅威を避ける手段とされる点、主体的行為に伴う点が挙げられるだろう。このうち前二者については、本稿の主題との関係上立ち入らずに、最後に挙げた主体的行為に伴う affection についてのみ見てゆこう。

『試論』での sensation affective では、自由な運動は、外的作用とそれに続く意志的反作用との間に sensation affective が挿入される点で、自動運動と区別された。『物質と記憶』でも、「それ〔affection〕は外から私が受ける震動と私が実行する運動との間に、まるで最終的な〔行動の〕進め方に非決定の影響を及ぼすかのように、入り込んで来る」(MM, 11.〔〕内引用者)と、同様の性格が述べられている。しかしさらにベルクソンは次のようにも言う。「意識は感情や感覚の形で、私が主体的に行っていると思う行動のすべてに立ち会っているが、反対に私の活動が、自動的になり、意識は必要ないと明言するや否や、意識は影が薄くなり、消え失せる」(MM, 12)。両者はともに自由な運動には sensation affective あるいは affection が関わることを述べているが、前者と後者の事態は同じではない。前者は外からの作用を受けて、後続する行動を自動的行動と他の可能的行動との間で選択させる契機であり、後者では、自由行為は affection を終始伴い、自動的行為には affection が現われないこと、すなわち affection の有無が主体的行動と自動的行動を分けている。ここには「意志と自動性の境界」を見ることができ、『試論』の sensation affective よりも一歩前進した観点が見て取れる。

だが、このことによっても依然として理性的自由については明らかにならない。そこで次に、『物質と記憶』で提出されたもう一つの「意志と自動性の境界 (la limite entre la volonté et l'automatisme)」(MM, 128) について検討することにしよう。

V. 分節言語の聴覚的再認

ベルクソンは過去の保存には二つの種類があるとし、それにともない、現在における過去の捉え直し、すなわち再認 (reconnaissance) にも二つの種類を区別する。ベルクソンの再認理論は当時の注意についての研究、とりわけリボーのそれがきっかけとなっているように思われる¹³⁾。リボーは『注意の心理学』で、注意を「自然発生的注意 (l'attention spontanée)」と「意志的注意 (l'attention volontaire)」の2つに区別する¹⁴⁾。ベルクソンもこの区分を踏襲しているが、「自然発生的注意」の代わりに「自動的注意 (l'attention automatique)」(MM, 119) の語を用いる¹⁵⁾。リボーにおいては、意志的注意も自然発生的注意と同様に受動的なものであるのに対し (C II, 373)、ベルクソンは意志的注意に能動性を置き、両者の間に文字通り「意志と自動性の境界」を画する。ベルクソンは再認の最も包括的な例として分節言語の聴覚的再認を取り上げている。発話を聞くこととは、「まず音を再認することであり、次いでその意味を再発見することであり、最後にその解釈を多かれ少なかれ推し進めることである」(MM, 119) として、ベルクソンは発話を聞く行為のうちに、「音の再認」と「意味の再認」という要素を抽出し、前者が「自動的な感覚 = 運動過程 (processus automatique sensori-moteur)」(MM, 119)、後者が「イメージ記憶 (souvenirs-images) の能動的な、いわば離心的な投射」(ibid.) であることを示す。そこで、われわれは次に、意志的行動と自動的行動の相違を明らかにするため、分節言語の聴覚的再認におけるこれら二つの過程を検討しよう。

V.i. 自動的な感覚 = 運動過程

ベルクソンは「音の再認」を、知らない外国語でなされる二人の人物の会話を聞くという場面において説明する (MM, 120 sqq.)。未知の言語でなされる会話を聞いている私の耳は、聞き分けることも復唱することもできないような音の連続を知覚するだけである。そこに語や音節を判別できるようになるのは、「聴覚的印象が、聞き取られた言葉の区切りを際立たせ、その主要な分節を示すことのできる生まれかけの運動 (mouvements naissants) を組織する」からである (MM, 121)。聴覚的印象は、それを模倣しようとする自動運動を私の内部に生じさせる。この運動は、最初は混乱しているが、反復されるにつれ、「単純化された形態 (figure) をあらわすようになり、聞く人はそこに話す人の運動そのものの、大筋や主な方向を見出すだろう」(ibid.)。このようにして生まれかけの運動が組織されて、「運動図式 (schème moteur)」が形成されることにより、耳に新しい言語の諸要素を教え込むことができたことになる。

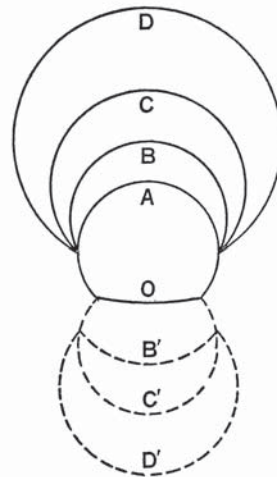
したがって自動的な感覚 = 運動過程によってなされる再認は運動図式の形成によって可能となる。ベルクソンによると、「運動へと引き継がれない知覚はない」(MM, 101) のであるが、この場合、知覚を受けて身体の中に生じる運動とは、聴覚的知覚を模倣しようとする運動、つまり調音に関わる筋肉の収縮や緊張である。同じ聴覚的知覚が繰り返し現われることで、それに連繫された特定の運動も繰り返し生じ、ある印象をある運動へと常に結びつける「感覚 = 運動結合」が形成され、これがベルクソンによって「運動図式」と呼ばれるものである。反復は漠然とした聴覚的印象の全体的運動を、それを模倣しようとする身体の要素的運動に分解するとともに、この分解されたものの連繫を保とうとする。この分解される要素的運動は、最初は漠然としているが、反復がこの運動に少しずつ正確さを与え、全体的運動の内部構造の特徴を示すようになる (MM, 122 sq.)。それは運動によってなされる再認であり、「自動的再認 (reconnaissance automatique)」(MM, 107) とも言われる。こうして運動図式は、音の連続でしかなかった聞かれた発話のうちに言葉を聴き分けることを可能にする。そこには「初歩的な判別力 (discernement rudimentaire)」(MM, 126) が含まれており、運動図式は「初歩的なある種の知性的作業 (un certain travail intellectuel rudimentaire)」(MM, 128) をなすものののだ。

V.ii. イマージュ記憶の能動的投射

次に「意味の再認」、すなわちイマージュ記憶の能動的な投射について見てゆこう。ベルクソンはこの意味の再認については、一人の対話者の発言を理解する場合において説明している (MM, 128 sqq.)。相手の発言を分かると思いつつ聞いている時、「私たちは、まず自分の知的作業 (travail intellectuel)の調子を整えるかのように、話し相手や、彼が話す言語、彼の表現する観念の種類、とりわけ彼の言葉の全体的運動に応じて変化するある種の態度に身を置いていると感じないだろうか。運動図式は彼の抑揚を強調し、彼の思考の曲折をたどりながら、私たちの思考に道を示す」(MM, 135)。

したがって、ここでも運動図式が意味の再認を可能にしていることが分かるが、その働きは音の再認におけるそれとは異なる。意味の再認は「注意的再認」であるとされ (MM, 128)、「注意」の本質的效果とは、知覚をより強め、細部を引き出すことにある (MM, 109)。われわれの知覚は、それが与えられた時、不明瞭で細部まではっきりと現われているわけではない。現在の知覚に類似する過去の記憶が投射されることで、知覚は判明なものとなっていく。「私の記憶力は新しい知覚の方へ

投ずる類似した様々なイメージを選ぶ。しかしこの選択はでたらめに行われるのではない。諸仮説を提案し、選択を遠くから司るものは、知覚が引き継がれ、知覚と思い出されるイメージの共通の枠として役立つ模倣の運動なのである」(MM, 112)。したがってこの投ぜられる記憶は恣意的に選択されるのではない。ベルクソンが「注意的再認は真の回路である」(MM, 128)と言う時に示唆されているのは、注意的再認のメカニズムを注意的知覚の回路と同様に考えねばならないということである。ベルクソンは注意的知覚を回路として考える。それは対象と記憶の領野を往復運動する閉じた円環である。この知覚回路を説明するためにベルクソンが示す以下の図は『物質と記憶』で示される三つの図の中でも、記憶の円錐の図と並んで重要なものがある (MM, 115)。



最も小さな円環 A は直接的知覚に最も近く、対象 O とその残像を含むだけである。それは、前田英樹の言うように¹⁶⁾、知覚対象の認識が身体的反応でなされるような、いわば動物的な次元と言えよう。こうした物質的・身体的な次元の再認を起点とし、記憶の領野への跳躍がなされる。ベルクソンにおいて記憶は潜在的なものである。ドゥルーズが指摘するように¹⁷⁾、ベルクソンの言う「純粋記憶 (souvenir pur)」は心理学的存在ではない。記憶とは潜在的、無意識的なものであるが、「ベルクソンは『無意識』という語を、意識の外にある心理学的実在を示すためではなく、心理学的でない実在を示すために用いている」¹⁸⁾。心理学的なものとは現在に属し、過去はもはや現在において効力を持たないものである。過去に「一気に身を置く (se place d'emblée)」(MM, 129) とは、こうした存在論的に異なる領野への飛躍なのである。注意的知覚において、既にある回路に別の記憶が入ってくると新たに回路は拡張されるが、個々の円環は閉じているため、古い回路を包含する新たな回路が創造されることになる。これらの回路は認知される対象以外に共通なものを持たない。新たな回路に記憶が入ってくる際、「精神の採用する緊張の程度に応じて、知覚が私たちの内に発展させる記憶イメージの数は増減する」のであって、すなわち、記憶の円錐で言えば、精神のとり水準に応じて記憶の水準すなわち平面が決定される。そしてこの両者を媒介するのが身体的態度あるいは身体の運動なのだ (MM, 112 sqq.)。運動図式を介して、知覚対象の水準と対称的に位置する水準の記憶が選択される (MM, 129)。相手の発言を理解する場合においては、対象は対話者であり、対話者の発言があらわす観念に対して、聴き手はそれに対応する自己の記憶としての観念に水準を合わせ、観念を喚起させる (MM, 128 sq.)。「現在の知覚に類似したイメージ、これらの運動が既にその形を投げかけているイメージは、もはや偶然ではなく、規則的にこの鋳型に流れ込みに来る」(MM, 107)。この想起の規則性とは、したがって、知覚を引き継ぐ運動によって運動図式を介して、

知覚に類似する記憶のみが喚起されるべく選択されることを言うのだろう。ただし、この選択される水準はただ一つではない。「私の耳にはっきりと聞こえた、外国語のある言葉が、その外国語一般のことを思わせることもあるし、あるいはかつてある仕方でその言葉を発音していたある声のことを思わせることもある」(MM, 188)。すなわち、類似にも様々な類似の仕方がありうるのである。記憶力は様々な類似の可能性を試し、それに応じて種々の記憶を投ずる。

自動的再認は初歩的な知的作業と見なされていた。自動的再認は「意志的注意(attention volontaire)の前奏曲」(MM, 128)なのであり、注意的再認は、「知性的再認(reconnaissance intellectuelle)」(MM, 128)と言われることから明らかなように、知性的な働きである。「他人の発話を理解する([c]omprendre)ことは、知的に(intelligemment)、すなわち観念から出発して、耳が知覚する音の連続を再構成することにあるだろう。さらに一般的に言えば、注意すること、知性によって(avec intelligence)再認すること、解釈することは、同一の働きへと混じり合い、この働きによって精神は、自己の水準(niveau)を確定し、生の(brutes)知覚に対して、多かれ少なかれその原因に近い対称的な点を自己のうちに選んでから、その知覚に重なる記憶を、それへ向けて流れ込ませるであろう」(MM, 129)。したがって、分節言語を理解する再認は、記憶の規則的な能動的喚起をまっぴらされる。そして、このことのうちに知性の働きがあると言えるだろう。

V-iii. 意志と自動性の境界

以上、再認における自動的な感覚＝運動過程とイメージ記憶の能動的投射をそれぞれ見てきた。両者を検討し、両者を隔てる「意志と自動性の境界」を明らかにしよう。

自動的再認では、知覚とそれに伴って身体のうちに生ずる運動の連繋が繰り返されることで、運動図式が形成され、ある特定の知覚に対して特定の運動が即座に後続するようになる。自動性とはこのことのうちにある。他方、注意的再認では、知覚された音に伴う運動図式にはまり込んでくる純粹記憶としての観念が喚起され、現勢化する。したがって、どちらの再認においても運動図式が関与していることが共通点として挙げられる。次に両者の相違点を見ると、自動的再認は記憶の想起を伴わないのに対し、注意的再認では純粹記憶の喚起が生じる。バルクソンが、意味の再認を「イメージ記憶の能動的投射」と特徴付けていることから、知覚に記憶を投射する能動性のうちに意志は位置付けられるだろう。自動的再認は「行動そのものの中で、状況に適した機構の自動的な発動によってなされる」(MM, 82)再認であるのに対し、注意的再認は「現在の状況のうちに最も入り込みうる諸表象を、現在へ導くために過去へ探しにゆく精神の労働を含む」(ibid.)再認である。この過去へ記憶を探しにゆく精神の労働のうちに、意志の働きがあると言えよう。この能動的想起は、現在の状況に適する過去の有用な記憶を喚起することで、知覚が自動的に運動に引き継がれる決定された感覚＝運動結合に非決定性を導入し、適切で、かつ決定されたものではない行動を可能にするのだ。したがって、意志と自動性の境界は記憶の規則的な能動的喚起にあると言えよう。

VI. affection と運動図式

以上、分節言語の聴覚的再認を例に、意志と自動性の境界について検討してきた。ここで再び、affection に立ち戻ろう。本稿の IV で確認したことは、affection も意志と自動性の境界であるとい

うことだった。この二つの「意志と自動性の境界」は関わり合っているのだろうか。

再認において見てみると、自動的再認と意志的再認の双方において、ともに重要な役割を果たしているのが運動図式であった。運動図式は特定の知覚を身体による特定の運動に引き継ぐものである。運動がまだ実際に行動として遂行されていなくとも、身体のうちには生まれかけの運動が生じる。「対象を用いる習慣はついには諸運動と諸知覚の全体を組織し、反射のように (*à la manière d'un réflexe*) 知覚に続いて起ころうとする、これらの生まれかけの諸運動についての意識が、ここでも再認の基礎にあるだろう」(MM, 101)。こうした身体に生ずる規則正しい (*réglé*) 運動反応についての意識が熟知感 (*le sentiment de la familiarité*) の基盤をなしている (MM, 101)。ベルクソンが既に『試論』から強調してきたように、われわれは自分の身体のうちに生ずる運動を感覚として経験する。ベルクソンは次のように述べている。「こうして私たちの意識のうちに生まれかけの筋肉感覚という形で、聞かれる言葉の運動図式、と私たちの呼ぶものが展開することになる」(MM, 121)。すなわち、運動図式は、生まれかけの筋肉感覚として、換言すれば affection としてわれわれの意識に現われる。そしてこの意識に現われる affection が意志的な記憶の喚起においては必要なのだ¹⁹⁾。「記憶が現勢化するためには、運動的な補助を必要とすること、また記憶が思い出されるためには、身体的態度にそれ自身差し込まれる一種の精神的態度を要求する」(MM, 133sq.)。こうした観念の想起に、身体についての感覚が関わることは、既に『試論』で触れられている。窓を開けようと立ち上がったなり失念したやりかけの行為について、身体の体勢を内的に感じることで、その行為が当初目的としていた観念が思い出されることをベルクソンは語っていた (DI, 120 sq.)。運動図式を介して知覚が身体のうちに生じさせる運動は、それが自動的に遂行されるのでない場合、意識に affection として現われる。運動図式を特定の記憶イメージへと展開させる意志的想起には affection が伴うのだ²⁰⁾。したがって、二つの「意志と自動性の境界」は一致すると言える。

VII. 理性的な自由

それでは以上の検討をふまえ、本稿冒頭に挙げたベルクソンの理性的自由のテーゼを明らかにしよう。

「考える存在である人間」という語には、続く「理性的」という言葉からも明らかなように、プロ達によって批判された感性的自然発生性による動物的行動から、人間の自由行為を理性によって画そうとするベルクソンの意図が垣間見える。V-i で見たように、自動的再認において運動図式は初歩的な判別力 (*discernement*) であるとされる。この判別作用は、純粹知覚論においても言及されている。外的知覚における意識の本質は、この判別する働きにある。動物の進化にしたがって、神経系が発達し、外的知覚も発達する。作用反作用によって緊密に連繫している外的物質世界から、われわれの機能と関わりを持たないものが取り除かれ、分離されたものが知覚である。意識的知覚の本質はこの選別にあり、この *discernement* が精神の到来を告げるものである (MM, 27 sqq.)。自動的再認における運動図式の判別作用は、一歩進んで知性を告げるものであり、「初歩的なある種の知性的作業」(MM, 128) とされる。デカルトが「よく判断し、真なるものを偽なるものから分かつ (*distinguer*) 能力」を理性 (*la raison*) と名付けているように²¹⁾、分別する (*discerner*) という働きは理性への第一歩と言えるだろう。

しかし、このように自動的再認が判別作用として初歩的な知的作業を含むとは言え、それは感覚と運動の決定された結合からなっている。優れた意味での精神は、記憶力によって過去を現在の内に存続させることで決定性をかいくぐることにある²²⁾。自動的再認では習慣として身体に保存される記憶が利用されるが、非決定性を可能にするのはイマージュ記憶である。こうしてイマージュ記憶の想起によってわれわれは自動的行為から自由行為へ、自動的再認から注意的再認へと移る。クレルモン＝フェラン時代の心理学講義で、ベルクソンは知性を、認識する (*connaître*) 能力であり、諸観念を組み合わせ、まとめるものとしている。そして、その仕事の多様さから、直観能力、論証能力、推論能力、記号と言語の産出能力といった多くの知性的能力が生ずるとする (C I, 90 sq.)。したがって、ベルクソンの言う知性には理性と通常呼ばれるものが含まれていることが分かる。「意味の再認」が「他人の発言を理解すること ([c]omprendre)」(MM, 129) において例示されることから明らかに、注意的再認は理性的働きによってなされる過程なのである。

V-ii で見たように、注意は知覚に記憶が投射されることにあるが、ベルクソンはこのことを「反射 (*réflexion*²³⁾)」になぞらえる。この「反射」という概念は、ベルクソンの認識論において本質的なものであり、ここで論じている注意的再認という高次の精神作用だけでなく、知覚を形成する低次の判別作用においても中心的な役割を担っている。純粹知覚論において、知覚は外的物質世界の諸作用がわれわれの機能にぶつかって再び対象自体へと反射されたものとされるからである。しかし注意における反射は、対象自体の作用の反射ではなく、われわれのうちに保存された記憶イマージュの知覚への投射であるという点で純粹知覚論におけるそれとは異なる。

しかしあらゆる注意的知覚は、語の語源的な意味において、真に反射 (*réflexion*)、すなわち能動的に創造され、対象と同一であるかあるいはそれに類似し、その輪郭に収まりに来るイマージュの外部への投射、を前提とする (MM, 112)。

こうした意味で注意的知覚は「反省的知覚 (*la perception réfléchie*)」(MM, 114) とも言われ、V-ii で示したように、知覚と記憶が回路のように後続し合う。ベルクソンが、「非決定だけでなく、理性的で熟考された (*raisonnable et réfléchie*) 行動の可能な精神」(MM, 249) と言う時、熟考 (*réflexion*) とは、注意的再認の、現在の知覚から様々な仮説すなわち選択の可能性に基づいて、記憶を投射する精神の試みを指していると考えられる。

したがって、自由行為とされる「感情と観念の総合」とは、次のように理解されるだろう。「感情」とは、精神が記憶を探しに行く出発点である、運動図式が準備する身体的態度の意識への現われを指し、他方、「観念」の方は喚起される記憶を指しており (MM, 140)、それゆえ意志的想起を意味していると言える。そこでは、記憶の選択は恣意的 (気まぐれ) ではなく規則的になされ、それに基づいて諸仮説の試み、すなわち熟考がなされるのだ。『物質と記憶』でベルクソンが至った「理性的自由」とは、意志による能動的な記憶の想起にあり、それによって人間は現在の状況に対して、決定されていない行動を取りうるが、この行動は過去の経験に鑑みてなされる、熟考された行動なのである。

『試論』では、自由には諸々の程度があるとされ、自由の最たるものは理由のない行為であった。『物質と記憶』では理性的自由行為がそれに置き換わる。「したがって、生の物質と反省力の最もある精神との間には、記憶力の可能な全ての強度、あるいは同じことだが、自由の全ての程度が存在

する」(MM, 250)。理由のない行為と理性的自由行為は *raison* に関しては対極に見えるが、理性的自由行為概念は『試論』の自由行為の定義にかなっている。II で見たように、『試論』では人格の現われが自由行為とされるが、人格は過去の来歴の総体であり、過去の記憶の現勢化をまっけてなされる理性的自由行為もまた人格の現われなのである。こうしてベルクソンは『試論』の自由論の問題点を克服し、理性的な自由行為という概念を提出しえたのである。

なぜなら、これら生体 (*corps vivants*) の目的が刺激を受取り、これを予見不可能な反作用に仕上げることであるにしても、反作用の選択は偶然に行われるべきものではない。この選択は疑いなく過去の経験を模範とするのであり、類似した状況が後に残しえた記憶に訴えることなくしては反作用はなされない。それゆえ、果たすべき行為の非決定性がたんなる 気まぐれ (*caprice*) と混同されないためには知覚されたイメージの保存を必要とする (MM, 67)。

記憶の規則的喚起によって気まぐれな恣意的行為から画される理性的自由行為概念が、プロやレヴィ＝ブリュールの批判を乗り越えるものであることは容易に見て取れるだろう。『物質と記憶』は心身二元論の問題を記憶力の考察に基づいて論じた著作である。だが、その最終章中の「心と身体」と題された最終節、そして結論部がともに自由についてのくだりで締めくくられていることを鑑みると、『試論』における自由概念の問題点を乗り越えることが、『物質と記憶』の隠された意図であるように思われてくる。『物質と記憶』では記憶力理論がその中心をなすが、ベルクソンにおいて記憶力は自由の同義語なのである (MM, 250)。

注

ベルクソンの文献は次の略号で示し、引用箇所を示す () 内の略号に後続するアラビア数字はページ数を示す。原文中のイタリックは傍点で表し、下線は引用者による。

DI : *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige, 9e éd., PUF, 2007

MM : *Matière et mémoire*, Quadrige, 8e éd., PUF 2008

C I : *Cours I*, PUF, 1990

C II : *Cours II*, PUF, 1992

- 1) 催眠を受けた被験者が、催眠中に与えられた指示に基づいて行った自らの行為を、その行為に先行する被験者の一連の意識状態によるものだと説明付けることを知っていたベルクソンが、自由行為を確保するためになしえたのはこのような定義だったのだろう。「われわれ自身の意志が、いかに意志するために意志することができ、その上、果たされた行為を、その行為が原因となっていた先行行為によって説明させるかを、この議論はわれわれによく納得させるのではないだろうか」(DI, 118 sq.)。
- 2) François Azouvi, *La gloire de Bergson*, Gallimard, 2007, p. 41 sqq. ; DI, 312 sq.
- 3) レヴィ＝ブリュールはエコール・ノルマルでベルクソンの2年上、プロは同期だった。 *Le centenaire de l'École normale 1795-1895*, Presses de l'École normale supérieure, 1994, p. 684 sq.
- 4) レヴィ＝ブリュールによる『試論』の分析と要約。In *Revue philosophique de la France et de la l'étranger*, mai 1890, XXIX, p. 536
- 5) Gustave Belot, « Une théorie nouvelle de la liberté », *Revue philosophique de la France et de la l'étranger*, octobre 1890, XXX, p. 373 sqq.
- 6) このように「気まぐれ (*capricieuse*)」と批判される余地をベルクソン自身が残していることは否めない。ある行為の着想は、それが未だ果たされていない時、思い留めることができることについての記述で、ベルクソンはそれに似た事実として子供や未開民族の「気まぐれ (*caprice*)」(DI, 158 sq.) に触れている

からだ。

7) *ibid.*, p.379

8) *ibid.*, p.392

9) こうした見解を、『物質と記憶』の邦訳者、田島節夫や、『試論』原典校訂版の校訂者アルノ・ブワニシュも述べている。ベルグソン『物質と記憶』田島節夫訳、白水社、2001年〔初版1965年〕、二九三頁、DI, 291.

ブワニシュは自由を「理由のない」と見るか、「理性的」と見るかは、『試論』でとられた直接的直観の観点によるか、分析的観点によるかの方法論の問題だとする。しかし『物質と記憶』で示される理性的進展としての自由行為には、方法論の問題以上の意味が込められていることが、本論VIで見るように、理性的自由が自由の最たるものとされる点や「感情と観念の総合」とされることから理解される。我々が本稿において試みるのは、同じく自由の最たるものと見なされる記憶力の働きから、ベルクソンの理性的自由の主張を解明することである。

10) *affection* は通常、受動性を思わせる語だが、ベルクソンの用法では身体に働きかける能動的側面も強くあり、訳語ではこうした側面が見えにくくなるため、原語のままとした。同様に *sensation affective* も原語を用いた。

11) 日本語では生理学的反射 (*réflexe*) と光や音などの物理学的反射 (*réflexion*) が共に「反射」の語で表されるが、ここでは生理学的反射の意である。「*réflexion*」の語と日本語の「反射」との対応に関してご教示いただいた京都大学医学部精神医学教室の深尾憲二郎氏に感謝します。

12) 加藤憲治も「自由の始まり」としての感覚に注目しているが、感覚の示すものを「自由行為に到る方向」としている。しかしベルクソンが「*sensations affectives* の強さは、始まりつつある非意志的運動についてわれわれが持つ意識」(DI, 26) と述べている点からも、感覚は自動運動を示すものと思われる。加藤憲治「ベルクソンの自由と感受性」『カルテシアーナ』No.11, 1991, p. 54

13) 『物質と記憶』に先立つアンリ四世校での心理学講義では、注意について一講が充てられ、主にリボーの『注意の心理学』が検討されている。

14) Théodule Ribot, *Psychologie de l'attention*, Alcan, 1896

15) ピエール・ジャンネにもベルクソンと同様の用語法が見られる。*Dictionnaire de physiologie*, tome I, Alcan, 1895, p. 837. ジャンネによる *Attention* の項を参照のこと。

16) 前田英樹『言語の闇をぬけて』、書肆山田、1994年、七三頁以下。

17) Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, Quadrige, 2e éd., PUF, 1998, p.50

18) *ibid.*

19) 前田英樹は、潜在的な領域に「一気に身を置く」というベルクソンの存在論的跳躍に、ソーシャルによって繰り返される、言語において実在的かつ具体的なものは、語る主体によって感じられるものであるという命題を重ね、この「感じる」ということを潜在的領域に「一気に身を置く」ことであるとしている（前田英樹、前掲書、一四二頁以下）。他方で、前田はベルクソンにおいては、「一気に身を置く」潜在性の領域から、記憶が現働化される注意的再認の過程は、身体的行動のみによって導かれるとしている（同書、二〇八頁）。前者のソーシャルの場合に見出された、言語の存在論的跳躍における感性の存在が、後者のベルクソンの場合では見落とされているように思われる。

20) Bergson, « L'effort intellectuel », *ŒUVRES*, PUF, 1991, p. 941

21) René Descartes, *Discours de la méthode*, Leyde, 1637, Flammarion, 2000, p. 29

22) 「なるほどイマージュ一般の中からの知覚の選択は、すでに精神の到来を告げる判別作用の結果であろう。……しかし精神の実在に触れるためには、個別的意識が過去を現在の内に存続させ、現在が過去によって豊かになることで、必然の法則そのものを免れる地点に身をおかねばならぬ」(MM, 264)。

23) *réflexion* の語には、反省や熟考、また物理学的反射の意味がある。

(本学大学院博士後期課程)